

ト★ 東星学園だより

TOSEI

東京都清瀬市梅園 3-14-47 TEL 042-493-3201 <http://www.tosei.ed.jp>

□ 西武池袋線秋津駅 南口 徒歩 10分 □ JR 武蔵野線新秋津駅 徒歩 15分

vol. 7

名前を呼ばれたくて…

校長・園長 大矢 正 則



東星学園の良さは、少人数教育にあるのではないといったら誤解を招くだろうか。しかし実際、少人数教育そのものが良いわけではない。個人的な経験になるが、私の出身高校は、1 学年 400 人程の学校であった。先生も大勢おられた。教科で教わる機会、行事で関わる機会、生活指導

や進路指導でお世話になる機会のいずれもなかった先生もおられたし、むしろそちらの方が多かった。名前を知らない先生がいることが当たり前だった。しかし、それらの恩師たちの中で、私自身が、この先生には本当にお世話になったという先生も何人かおられる。

たとえば、1 年生のとき、新任であった A 先生。どういっきっかけかわからないが、下校中の私を見出した A 先生は、ご自身が通勤のために使用していたマイカーに私を乗せ、小一時間かかる自宅まで送って下さった。無口だった私から、道すがら上手にいろいろと話を聞き出して下さった。何を話したかはまったく覚えていないが、私が一つの話を終えると、その都度、あまりコメントを差し挟まずに、「ふーん」と頷いて下さったことを今でもよく覚えている。現在は教職員のマイカー通勤も、生徒を自分の運転する車に同乗させることも許容されないことであるが、当時は、あり得ることであったし、それを知った私の親も喜んでくれた気がする。私も嬉しかった。

2 年生のときの担任の B 先生は、とても穏やかなベテラン教員で、一見、熱意のなさそうな淡々とした先生であった。学校を休みがちであった当時の私は、この先生から短い電話を、しばしばいただき、「夕方でも良いから学校に顔を出しなさい」と声をかけられた。当時はまだ不登校という言葉も、登校拒否という言葉もなく、定かな理由もなく学校を休むのは、「さぼり」の一言で片付けられていた時代、出席日数不足で進級不可になる寸前であった私が、どうにか 3 年間で高校を卒業できたのは、B 先生の 1 年間通しての絶え間ない働きかけのお蔭と今でも感謝している。先ほど、熱意のなさそうな淡々とした先生と書いたが、それは当

時思っていたことであって、いま、教職に身を置くものとして、あの絶え間ない働きかけは、熱意のような曖昧なものではなく、師のそもそもの対生徒姿勢、教育観に因るものであったと確信している。

最後に C 先生。C 先生には、教科指導をはじめ、学習面、生活面、進路面の多岐にわたり、在学中のみならず、卒業後も長い間、何かと相談に乗っていただいた。私自身が数学教師の道を選んだのも、数学教師であった C 先生の影響が大きかった。大学では物理を専攻したものの、教師になるなら数学と決めていて、数学の教員免許を取った。C 先生から最後のアドバイスをいただいたのは、今から 10 年ほど前であった。高校を卒業してから 30 年も経ってのことである。詳細は省くが、要は「しっかり生きていきなさい」という主旨のことを言われ、「はい」と応えた記憶がある。ご高齢になっていた C 先生は、それからまもなく召されていった。「しっかり生きていきなさい」という宿題を最後に出されたのである。これを私は、「いのちを大切に生きていきなさい」という、師からの遺言であると理解している。

出身高校は、ミッションスクールでも少人数学校でもなかったし、公立校であったので、これといった建学の精神もなかった。卒業後、母校には教育実習のときを除いて行ったことがない。母校を避けているのではなく、もともと知らない先生ばかりだからである。

さて、東星学園であるが、ミッションスクールであって、少人数であって、建学の精神もある。しかし、大切なことは少人数であることや建学の精神の字面ではなく、それを具現化する教職員がいるということ、たとえば、前述の A 先生、B 先生、C 先生のような教師が、『個別に』、一人ひとりの園児児童生徒に対して存在しているということである。これは、少人数教育によって可能になっていることなのではなく、一人ひとりの教職員が、一人ひとりの園児児童生徒を、かけがえない存在“Being”として尊重しているからこそ可能となっていることなのである。それは、全教員が一人ひとりの子どもの名前を知っていることにも現れている。そして実は東星では子どもたちもまた、自分たちの先生の名前を全員知っているのである。

今年のホームカミングデーには 100 人もの卒業生が戻ってきた。また、名前を呼ばれたくて…なのかもしれない。